

## 令和7年度練馬区立幼稚園検討委員会（第3回）の要点

日	時	令和8年1月26日（月）	
時	間	18時30分から20時00分	
場	所	練馬区役所本庁舎12階 教育委員会室	
出	席	者	学識経験者、区立幼稚園 利用保護者、練馬区私立 幼稚園協会、区立幼稚園 長、区職員

### 開会

#### 1 区立幼稚園における幼小連携について

##### 【委員からの主な意見】

- ・ 令和6年3月に作成した「ねりま幼保小の架け橋期プログラム」は、区立幼稚園長として作成作業に携わった。大枠として作成したため、今後は区立幼稚園と小学校とで実地レベルで連携がとれる体制を目指していく。

区立幼稚園は3園しかないが、小学校との連携と園内研究の内容が具体的につながるように、作って終わりではなく、小学校、中学校への発信をしている。

- ・ 本園では、近隣の施設（小学校、保育所）と架け橋期プログラムについての話し合いを実施しているほか、小学校の校長先生に来園を促し、幼稚園での保育を実際見ていただき、架け橋のつながりを考えてもらっているほか、文科省が提示する幼児教育の質の大事さを校長先生と共有している。

幼児教育の質の大事さについて、保育園・幼稚園の園児保護者に対して小学校長から講演会をしてもらうことを昨年度から毎年行っており、保護者への啓発にも力を入れている。

実際の連携では、区立幼稚園は3園しかないため練馬区全部を考えたときの連携は難しいが、教育委員会が実施している幼児教育研修会では、実際の教育保育現場をそれぞれの先生たちが見に行くという形式の会がある。そこでは、幼小連携の実例、幼児期の終わりまでに育ててほしい姿などを話し合う機会がある。また、公立幼稚園の教員も様々な地域の公開保育の研究発表会に参加できている。

また、練馬区の中には人権教育推進委員会というのがあり、幼稚園や小中学校での人権教育を見学するほか、講演会や協議会を行っている。その観点でも幼小の連携がある。

- ・ 幼保小連携推進方針の中から抜粋されている各施策項目の実施率に関し、母数が216園

だが、幼稚園と保育園で分計することで、幼稚園と保育園に対してアプローチの仕方が変わったりするのではないか。情報交換は、学校教育基本法の中で定められているとおり、進学する際にほとんどの幼稚園は小学校と連携をしてやっていると思う。

園児と児童の交流活動については、保育園は数が多く、小学校としての受入れ限界という点から、達成率 100%という目標は大変ではないか。

- ・ (事務局) 母数 216 園の内訳は、現時点では押さえていない。216 園の内訳としては区立幼稚園が 3 園、区立保育所が 60 園 (ともに回収率 100%)、私立幼稚園は 32 園、私立保育所は 110 園 (ともに回収率 84%)、認証保育所は 11 園 (回収率 65%) であった。ある程度の数は返ってきており、傾向としては大きく違わないといえるかと思う。
- ・ 最終目標は、連携実施率の向上でよいか。
- ・ (事務局) 幼稚園や保育所から小学校就学に当たってのスムーズな移行を進めていきたい。
- ・ 幼稚園と保育園でおそらく傾向があり、支援 (アプローチ) の仕方が変わるということはあると思う。
- ・ 幼小連携の懇談会などに参加すると、新しくできた施設の先生方から、「初めての卒園であり、小学校との交流・連携方法がわからない」という声も耳にする。困っている先生がいるということは、困っている園児がいるということ。縦と横の結節点である区立幼稚園がこれまで積み上げてきた経験やノウハウを区内の幼児教育施設と一緒に共有していけるよう、力を発揮していきたい。

また、近隣の私立幼稚園や私立保育所の先生方とは、配慮を要する園児に関しケース会議を実施していることを伝えたり、特別支援の専門家による勉強会にお呼びするなど、連携を主導している。そうした取組が私たちの果たす役割と思っている。

- ・ 小学校と協働した 5 歳児の指導計画等を基に、幼児教育から小学校の 1、2 年生までの接続に関する全体的なカリキュラムを共有することが、公立幼稚園ができる連携だと思う。スタートカリキュラムをしっかりと共有し、子どもの育ちを発信していくことが重要。
- ・ 指導計画は大枠として作成されたため、今後は具体的な連携施設と個別の話し合いが必要。区立幼稚園でも、近隣の小学校との個別の話し合いに踏み出したところ。
- ・ フォーマットができていますので、連携方法含めてノウハウの共有をしてほしい。「私立幼稚園への提供」と資料にあるが、私立幼稚園の認識はどうか。
- ・ 私立幼稚園全体で見たときに、自由保育に傾倒している幼稚園もあれば、カリキュラム指導の園もある。子どもの育ちのゴールイメージを基にどのように適用していくかという考えの方が、自然に受け入れられやすいと感じる。その中の実践例の 1 つとして、公立幼稚園の具体例が参考になると思う。
- ・ 大枠のカリキュラムを各園で編み直して、独自のスタートカリキュラムにしていこうということになると思う。ただ、実際の編み方が分からない園もあると思われるため、公に作った書類

を基に新しい実践ができるような開かれた提供を考えてほしい。

- ・ 前回、区立幼稚園を2園に集約していくという話があったと思う。中核を担う公立幼稚園を減らして、幼小連携を行う幼児教育施設を増やすというのは矛盾していないか。
- ・ (事務局) 3園から2園というのは、園児数の減少を踏まえて、適正な規模をどう考えていくかという点での一つの考え方。

幼小連携で区立幼稚園が中核的な役割を担うというところもあるが、各施設への手本を示して、幼小連携を行う幼児教育施設を増やしていくと整理している。

- ・ 前回、3年保育と長期休業中の預かりを実施したうえで集約を検討した方がいいのではないかという意見があったが、その点はいかがか。
- ・ 幼児数が減っているという現実への対応と、社会的に求められる機能への対応の両方をにらみながら考えていくしかないと思う。
- ・ 3園から2園にするとしても、3年保育や長期休業中の預かり保育の実施に対する効果検証を経てからはどうか。

また、幼小連携についても、今保たれている質が担保できるよう、事前に重要なポイントを設定しておき、後で効果検証ができるといいのではないか。

- ・ 区立幼稚園が減ったとき、やはり保育園の方がいいのでは、ということになると、私立幼稚園にも影響があるのではないか。地域に根づいて教育を実践してきた園がなくなるのは避けるべきと思う。単純に集約するのではなく、もう少し議論した方がよいと思う。

私立幼稚園としても、今後の園児数の推移については不安ではあると思うがどうか。

- ・ 区立幼稚園の存在は大きい。私立幼稚園協会全体で考えると、区立幼稚園が2園のほうが不安要因は減ると思う。いずれにしても様々なことを発信する区立幼稚園の機能が、具体的にどうあるべきかが明確である必要があると考えている。

もう一方で、区として子どもが減っていくという状況の中で、ニーズのないところに税金を使わないという方向性もあると思う。

- ・ (事務局) 実際に3年保育や長期休業中の預かり保育のニーズがあるというのは、受け止めている。

3園から2園にするとしても、段階を踏まなくてはいけない。その中で、ニーズにどう応えていくのか、人数は変わっていくのか、という点も検証することはあると思う。

本検討委員会でも、区立幼稚園運営の今後の進め方や役割など、様々な議論がある。意見を踏まえて調整していく必要があると考えている。

- ・ 充員率だけではなくて、区内への影響力や教育の質の高さなど、2園と3園のどちらがふさわしいか基準があれば、集約も慎重に進められるのでは。
- ・ 集約の点ではなくて、今日の議題から。区立幼稚園の取組、架け橋期プログラムの取組のノウハウを私立幼稚園に提供する、としたときに、3年保育という同じ土台に立って実施

した方が、共通項ができ、より効果的ではないかと思う。今後の区立幼稚園のあり方は、集約よりは3年保育の方にフォーカスしていただきたい。

## 2 区立幼稚園における子育て世帯支援について

### 【委員等からの主な意見】

- ・ 未就園児の会の参加者は1・2歳児が多い。自宅近くの園の見学や、気軽な相談を目的とした来園があるが、参加者自体は少ないと感じている。
- ・ 未就園児の会では、修了児の保護者の方が参画し、会を開いてくれることもある。修了児の保護者が携わることで、相談に来た方も気軽に話すことができる場ができており、こうした保護者などを中心にして未就園児の会を行うことにも取り組んでいる。

また、未就園児だけでなく、別の園に在園している園児の保護者からの相談もある。聞き取り、共有し、寄り添いながら対応をしている。

保護者以外では、ベビーシッターの方たちが利用するケースもある。遊び場がない、あるいはどこかへ行くと危ないかもしれないという中で、公立幼稚園の部屋とおもちゃを活用してもらっている。

子育て世帯支援としては、保護者同士のコミュニティも大事にしている。

子育て世代の保護者は、孤独だったり、同世代でお子さんを比較してしまったりということもあるが、様々な年齢層の中では安心できる声掛けがもらえる。本園では修了児・在園児・未就園児の保護者が集まる場所をつくり、園長がコーディネーターとして話に入るという取組みも行っている。

ほかにも、教育相談として、未就園児の会の際、心理士による心理相談の場を設けることを始めた。子どもたちが遊ぶ中で相談ができる。初回は2時間で4組の保護者から相談を受けた。こうした取組も公立ならではと思っている。

配慮を必要とする未就園児の保護者からは、未就園児の会でこれまでも相談があり、そうした方にも未就園児の会は必要な場だと考えている。

- ・ 資料2の4の②について、補足を。
- ・ 資料2の4の②について、「配慮を要する未就園児に対する相談体制の整備」と記載している。発達障害も含めた配慮を要するお子さんに対する支援について、きめ細やかに進めていきたいという施策の一環である。

配慮が必要なお子さんは小学校入学に当たり就学相談を行うが、就学相談よりも前に保護者の方が不安を感じているというケースが多々ある。その中で、区立幼稚園の空き教室を利用して、就学相談よりも前の段階で相談を承る体制をとるための施策である。

民間の支援機関と連携した施策であり、令和8年度には、ほかの区立幼稚園でも実施していきたい。

- ・ 配慮を要するお子さんでなくても未就園のときに相談したい、そういう先を探している人がいると思う。一方、「配慮を要する」と記載すると、配慮を要するかどうか未就園児の保護者は分からず、相談につながらないのでは。

また、「配慮を要する」と記載すると、「配慮を要する子は公立園」という道筋を強調してしまうのではないか。

- ・ (事務局) 配慮を要する方限定ということではない。今後は周知の仕方等考えていく。
- ・ 今回は、「お子さんのことで心配なことがある方はよろしければご相談ください」という趣旨での発信をしている。

そもそもは、発達支援も含めて早期発見・早期の療育開始を就学相談より前に行うという観点で検討が始まった。「配慮を要する」という言葉が出ているが、目的としては、3歳児健診で経過観察となった子どもたちの早期の相談先を確保するという点だと思う。

- ・ こういった相談事業などは、区の様々な施策で整備されていると思う。区では、こうした現行の取組が、受け皿として足りていないという認識か。
- ・ (事務局) 配慮が必要なお子さんの保護者の方が不安を抱えるケースが非常に増えている。既存事業があり、重なる点もあると思うが、気軽に相談できる箇所が幾つあってもいいのではないかと考えている。

また、相談をしてもその先につながるのに時間がかかるケースもあり、今回のように直接心理士に相談ができるのはメリットと考えている。

- ・ 外国籍のご家庭も含めて、幼稚園のソーシャルワーク機能をこんなに先生方が担っている。先ほど、交流・開放事業の来園者が少数になっているという課題があったが、交流・開放事業は必ずしも入園とつながるものではない。来園者が少ないのは、就園を検討している園児が少ないからではないと思う。

公の幼稚園が行うからこそ、外国をルーツに持つ子どもたちや特に配慮を要する子どもたちも含めた公共の利益を念頭においた子育て支援のあり方が重要。

来園者を増やすためには、子育て相談のニーズと開放事業を緩やかにつなぎ、中身を充実させる必要があると思う。未就園児の名前バッジがあったり、成長記録が継続してつけられたり、手形がとれて成長を感じられるとか、そうした継続的な子育て支援が課題なのではないかと思う。

- ・ 交流や開放事業の目的として、入園につなげたいという思いはやはりある。地域の幼稚園に来て、見て、数年後の自身の入園を楽しみに待つということを目的としてこの事業は開園当初から行われていたと思う。

今は地域への開かれた事業として、保育園への就園を予定している方、ベビーシッターの方へも交流・開放事業を行っているが、利用数が少なかったり、低年齢化している現状がある。

また、中身の充実のためには工夫をしなければならないが、人員が配置できず、私たち管理職が通常の仕事の合間を縫いながら対応している。保護者の力も借りてはいるが、更に付加価値をつけていくことが課題と感じている。

- 光が丘の保健相談所に出向き、幼稚園や未就園児保育の紹介もしている。「入園」を目的に交流・開放事業を行っても難しいので、地域の幼稚園を知ってもらい、一緒に子育てを楽しんでもらうことを目的に活動している。
- 例えば板橋区では、保育所や幼稚園にシーツやおむつを置き、赤ちゃんステーションのような取組をするなど、お母さんが一息つけるような場所があると聞いている。

また、今のお母さんたちは、「遊び」が思いつかず調べるケースもある。子育てのヒントを渡すようなことであれば、園長先生でなくてもいいと思う。修了児の保護者や大学の学生たちと協力した地域の拠点としてのあり方なども検討してほしい。

- 遊ぶ場の提供とあるが、今のお母さんたちは遊び方が分からないことがあると思うため、行く目的が大事だと思う。

絵本専門士を園に配置し、絵本を通じて親子をつなげられるような事業を行うなど、来園の目的を明確にしてはどうか。相談ありきではなく、今あるものを生かしながら、開放事業や子育て支援をしていったらよいと思う。

- 区立幼稚園の価値は、信頼が置ける園長先生が存在するということ。その先生が寄り添い、話してくれることだけでも、十分価値がある。

来園の仕掛けづくりは必要かもしれないが、区立幼稚園には市場原理主義よりも大事な観点があると思う。それは例えば、保育園を希望する保護者に、育児の大事さを伝えること。修了児の保護者も交え、幼児期の親としての幸せな時間を伝えていくことも大事。

子どもと毎日幼稚園に通いたいと思う親御さんを生んでいくのも、公立幼稚園の強みで生かせるのではないか。

- 区立幼稚園の先生方がつくっている子どもの成長に関するドキュメンテーションがあると思うが、あれを保護者の方と共有すると、子育ての喜びにつながると思う。ぜひ保護者の方と共有していただきたい。

汚れてしまう泥遊びの中に実はこんな学びがあると気づけたら、親御さんは楽しく泥遊びしているのを見られるようになると思う。

今あるノウハウなどをしっかり家庭に発信することで、幸せな家庭が増えるかなと思いました。

- 区立幼稚園を利用されたお母様方の言葉はすごく共感できると思う。そういう方との交流の場ができていらっしゃるの、それを生かさない手はないのではないと思う。